"Phèdre" の登場人物（Ⅳ）

村　島　実恵子

Phèdre "Le ciel, tout l'univers est plein de mes aieux"

ヒロイン・フエードル（ギリシア神話のフエードラ）は天王星の子孫といわれていたクレタの王女であった,（ＢＣ.15～18Ｃ）。その頃クレタ人と海の男達は東地中海で勢力をふるい主導権を握っていた。また黄金文明と不滅の伝説の時代でもあった，例えばダイダロスによるクレタ島の迷宮建設，イカロスの逃亡，牛頭人身の怪物ミノタウロスの伝説等がある。

呪われた家系の子孫であるフエードルはジュピターとアポロンの家系である賢人ミノスの娘であった。彼女はまた，アリアンヌの姉妹でミノタウロスの異父姉妹でもあった。彼女の家系の女性達は太陽神が神々にマルスと女神との罪ある愛を暴露して以来，ヴィーナスの憎しみを受けつづけていた。パシフアが最初にその運命に見舞われた，ミノタウロスは雄牛との愛の結晶として雄牛の頭と人間の肉体を与えられていた。彼は人間の肉を食物とし,その犠牲者もまた運命づけられていたのである。その為にテゼー王子には一日にほんの僅かな食事しか与えられなかった。彼はミノタウロスを殺すことを考える，彼はアリアンヌの手助けにより，腕に糸を巻きつけて道をみつけ出し迷路から脱出することに成功する。勝利者テゼーはアリアンヌを連れて島を離れた，そしてまた同時に彼女の姉妹であるフエードルにも関心をよせた。

アリアンヌが次いでヴィーナスの復讐をうけることになる。テゼーとの旅の間，彼らはナクソス島に立ち寄る。テゼーはフエードルに恋心をいだき，アリアンヌをさっさと見捨ててしまう。彼はトルゼヌに帰ってフエードルと結婚することを望みアリアンヌを置き去りにする。

別の伝説によるとアリアンヌはその島の王と結婚して幸福になったとい

われている，それと反対に絶望の果てに死んだという伝説もある。アリアンヌとテゼーの物語はコルネイユの戯曲ではアリアンヌというタイトルをつけられており，これが詩人ラシーヌによって完成されたといえよう。

ラシーヌの戯曲の中で"フエードル"のように唯一人の性格についてこれ程愛の情念を追求した作品はないのではなかろうか，デラクロワの指摘するように抑えることの出来ない愛の情念を追求しているのである。フエードルの愛は自己の情念とたたかう愛であり，王女としての定型的な愛のかたちではなく，地獄の審判者ミノスの娘として心の奥深く根を張った純粋な要求でもあった。

そこにモラルの概念が彼女の心の中で心理的な概念と交錯して，自己の冷撤な意識で錯乱状態に陥いるほど自己分析を行い，自己を徹底的に知りつくそうとし且つ自己を判断しようとしている。そこにフエードルの自己認識の深さと鋭さを読みとることが出来る。このことが観客の求める要素とまじり合ってヒロインの思考に満足出来ることになる。その結果としてフエードルのもつ彼女の二面性にまで考えが及ぶということになる。

デデヤンも指摘しているように"病めるフエードル，純なるフエードル"の姿が観客の前に浮かびあがってくるのである。純なるフエードルの姿は172，116，309行目の彼女の言葉で浄化の望みが彼女を支配していることが分る。しかし国王テゼーの戦死の報せをうけるともう一方の考え（義理の息子イポリットに対する愛情）が表面に表われ，それが希望となって彼女の心を占めるようになる。《彼女は自分の近親者へ愛を抱くことは恐ろしい罪であるという考えから，許される愛になったという錯覚を持つようになった》(注１)

国王テゼーの戦死の報は誤報であり，無事帰還したテゼーを迎えてフエードルは彼女のそれ迄の考えを修正し今度は後悔と羞恥の思いにとりつかれた。彼女は自分自身が追いつめられ，死によってしか救いを見出すことは出来ないと自己を責めつづけ，そして遂には彼女が終局に至る迄心理的な拷問をうけ入れようと考えが変ってゆくのである。フエードルは義理の息子がアリシ姫を愛していることに嫉妬心を抱いている，その心の揺れ動くさまをラシーヌは表現しているのである。

ラシーヌはエルミオンヌ，ロクサーヌのように女性のもつ嫉妬心を描写する術を知っており，フエードルに対してはこれをより残酷にえがきだし

ている。ここでまた彼女の後悔と羞恥の念は消え，新たに彼女自身が主人公になってゆくのである。そのことはイポリットの死体を目の前にしてさえ尚も美化しようとする考えにとりつかれていることからも分る。フエードルは自己の罪を認め，もう隠そうともせず卒直に真実を表明してゆくので観客の同情，賞賛を得る悲劇のヒロインを演じることになる。フエードルの心の推移を辿ってみたが，ジャン・ルイ・バローはフエードルの人物像やその性格について記述している。そしてヒロインの姿をあますところなく描き出している。《ラシーヌは153～157行という最小限度の韻詩で登場人物をより一層効果的に描き出している，フエードルは瀕死の状態に追いつめられている，彼女の生命はまさに一本の糸に支えられているようなものである。158～161行ではフエードルは王女であり，気まぐれ女性の姿を表している。169～172行では太陽王，貴族の娘としての誇りが描かれている。176～178行では恋のとりこになり魔物にとりつかれたいけにえとして描かれている，ここでは彼女は神々の呪いをうけているのである。180～184行に於ては後悔と恥ずかしさのあまり真実を卒直につげることを望んでいる。第四幕に於てもこの5本の柱が左右に揺れ動いていく心の動揺をあらわしている》(注2)

イポリット

彼はアテネのテゼー王の息子であった。恋多き冒険家テゼーとアマゾススの女王アンティオペとの物語は有史以前のいきな話となっている。

好戦的，野性的なアマゾネスである彼女達は男性に支配される事に我慢ならなかったのである。清純な英雄であるイポリットは純心なアルテミスを崇拝する運命におかれていた。そしてアフロデイテ（ヴィーナス）の犠牲――即ち恋の盲目者となったフエードルの犠牲者として悲惨な死をとげるという運命にあったのである。イポリットはトレゼーヌの神殿に祀られたという伝説になっている。

イポリットの特性は彼の激しい自尊心と罪ある愛の誘惑との葛藤でもあった。彼は国王テゼーを尊敬し，父王の命令を尊重するあまりテゼーの囚われ人であるアリシ姫を愛し，彼女と結婚したいと望むことに罪の意識を感じている。愛の女神の崇高さと誇りに追いつめられ死にまで追いこまれてゆくのである。イポリットは自己の不幸な運命に対してさえ罪を感じている，その点では彼もアリシ姫の運命に似ているといえよう。

ドレフユス・ブリサックが指摘しているのは"私達が賞賛するのはユーリピデスに於てであり，それはもっとも不純で不実な女性と，もっとも純粋で誠実な男性とのコントラストである"青年イポリットの行為は若者すべてに通ずるものである，通俗的な恋愛の不幸は私達に何ら感動を与えることはないが,イポリットの例外ともいえる人物像に賞賛を送るのであり，純な英雄としてうつるからである。ユーリピデスにおいてはイポリットはデイアンヌに自己を捧げた聖人として描かれており，肉体の誘惑にまどわされることもない。この精神の向上にみちた人物，精神の高貴さに夢中になったこの人物はセネカにおいては哲学者として修正されており，自己の勿体ぶった美しい言葉で老成してゆく為に自分の若さを忘れてしまっている。

ラシーヌはその人物をより人間的な存在として修正を加え，そこに臆病さ，希望，高貴さ，誇りをまぜあわせている《光と潔白さのコントラストでフエードルが占有していた黒い天使とを対立させている》(注３）このコントラストがフエードルを苦しめ彼女の義理の息子の純粋さをこわそうとし，しかもこの純粋さは死においてしか解決しないというところまで追いつめてゆく,《それ程彼女は陰険である》とデルクロワは書いている，それはまたモラルが要求している愛の新しい変形ともいえよう，正義の容赦なき国王，イポリットは一度は死ぬが，そのあとに残るのは判断の完全さを示すもの，完全なる美徳を有する人間が打ちのめされた結果のやむにやまれぬ叫びであったといえる。

テゼー

伝説の中のテゼーは彼の息子が自分の青春時代のいろいろなあやまちを知ることを望んでいない。テゼーの友人ピリタウスは彼をあやまった方向にひっぱって行こうとしている。国王は別の王国があること，それは輝やかしい武勲の数々をたてた英雄にも愛の力が人間の尊大さを弱めるものであるということである。第四幕の地獄の暗示を示す場面ではフエードルの幻覚を準備するために用いられている。遂に神々のいざないに目のくらんだテゼーはフエードルの乳母エノンヌの偽りの言葉即ち"イポリットが義理の母フエードルを愛している"という言葉を信じ怒りのあまりイポリットに懲罰を加える共犯者になってゆく。それはフエードルの態度による結果でもあるが。

フエードルは後悔の念に苦しむあまり自分自身の苦しみと恥ずかしさを覆い隠す為の場を探し求め，結局テゼーはフエードルの命を守ろうとするのである。ジャン・ルイ・バローは《悲劇の登場人物たち》の中で次のように書いている"テゼーのみがはっきりと卒直な精神の持み主であるといえよう。彼は告白しなければならない心の秘密も持っていないし，また彼自身をのみこんでしまう程の情熱も持っていなければ，自己の満足の為の禁じられた欲望を持っているわけでもない"事実フエードルとイポリットでは単純な変化しかみられず，先ず彼らは自分自身との闘いに，次いで彼らの情熱に身を委ねるということになっている。要するに愛は彼らに身の処し方のいろいろな方法を語らせているのである。フエードルは自分のイポリットに対する情念が断ち切れないということが分って死をのぞむようになったり，或は危険を感じると自己を救うことに懸命になったり，競争相手のアリシに嫉妬心を覚えて自己を見失ってしまう，ここでは愛が全てを方向づけているのである。テゼーではもっと複雑に，彼の自由意志とは関わりなく外部からの働きかけによる反動となっている，それは彼の意図しない全ゆる方面から苦しめられることになる。《たえず彼の中の躍動感はさしとめられ，予感に苦しめられ，中傷に悩まされ，それが怒りにかわり，彼の息子イポリットが愛の盲目者になったという告白に心を痛め，アリシ姫の脅迫に且つおどろき，フエードルの乳母エノンヌの自殺に出会い，心は動揺でさまよいつづけるのである。彼は人が打ち返してくる球のようであり，またエノンヌの運命を思い起してみるとそこにテゼーは偶然さをみつけたかも知れないし，神々が正義をもたらす為の道具にしたとも考えられる》(注４）ラシーヌは私達に一人の人間が他の人達と同じような過ちをするという問題を明らかにしている，しかもより毅然とした態度で耐えていること，彼の自尊心が彼を支えていることを示している。この三人の人物の中ではやはりフエードルが精彩を放っているといえよう。そのことはラシーヌが当初つけた"フエードルとイポリット"というタイトルを"フエードル"だけにしたことからもうかがわれる。

この三人の登場人物‥テゼー国王，イポリット王子，フエードル女王‥は舞台の上では皆同じ扱いをうけているにもかかわらず，ヒロインフエードルに較べると他の登場人物の影がうすいように思われる。

エノンヌとアリシ

フエードルの戯曲において上記以外の他の二人の登場人物も忘れてはならない。それはエノンヌ（フエードルの乳母）とアリシ姫についてである。二人の主役フエードルとイポリットを悲劇の渦中に引きこみまた二人を苦しませる人物でもあるからである。

先ずエノンヌについて‥この登場人物はユーリピデスやセネカの戯曲における登場人物を踏襲している，ラシーヌによって古代の人物が近代化されフエードルの心の打ちあけ話の聞き役になっていることである。《彼女はフエードルの乳母であった。フエードルが生れて以来一緒に過し，母親以上に親しい存在であり，彼女はフエードルを選ばれた子として養育している。庶民生れで奴隷として売られ，或る貴族の家庭にものとして買われたエノンヌにとって自分の乳で育てたフエードルとのつながりだけしか彼女には社会とのつながりがなかったからである》とデデヤンが書いているようにエノンヌはフエードルの感情，思考を良く知っているのである，心の病いにとりつかれたフエードルが義理の息子イポリットに恋心をもっているという病める"彼女の娘"を見てエノンヌはフエードルの病いをいやす為に献身的につくしいろいろ努力をするのである。

ラシーヌはエノンヌとテラメーヌを登場させることによって悲劇アンドロマク以上に生き生きとした人間的な感覚と献身を自分達の主人に捧げる型の人物像を描き出している。第一幕第一場において，イポリットの乳母テラメーヌはイポリットに愛に屈するようにと注告している，エノンヌはフエードルにもそのように言っている。そしてエノンヌは彼女の女主人フエードルをネロンに対するナルシスのように過った方向に導いていくのが分る。第三幕のはじめでは反対に彼女はそこからそらせようと努めている，結果としてエノンヌの注告がフエードルの不幸に結びついていくのは彼女がフエードルに母性的な愛をもっていたからであろう。彼女の感情には自分が背徳行為をしているとか，愛の犠牲者に計算ずくであるという気持は少しもなく無私無欲でフエードルが全てであることがわかる。その為彼女の女主人フエードルが彼女を追放する場になってもラシーヌは彼女にフエードルに対する信頼さを失っていないということを舞台で表現させている。フエードルが自分の非を悟り死を選ぼうとしている時においてさえも。

《悲劇においては，恋の打ちあけ話を聞く役の人物は主役の人物と表裏

一体となるのである。もしフエードルの衣服が赤の色合いであればエノンヌの衣服は殆んど黒に近い赤の色合いということになり，フエードルの影となるのである》(注５)

一方アリシにおいては"冷酷な運命の悲しいおもちゃ"（418行）であるが，結果としては悲劇の勝利者としての人物になる。戯曲最後の言葉でそれが証明されている。

"Que malgré les complots d'une injuste famille, Son amante anjourd'hui me tienne lieu de fille."

彼女はテゼーの従兄弟でテゼーの王座を横取りしようと反逆を企てたパランティトの妹であった。テゼーはその一族を殺しアリシ姫は因われ人としてテゼーの王宮にいた。その上彼女は結婚することが禁じられていた，そのことがイポリットが彼女に対してとった態度のもう一つの理由でもあった。彼女は兄弟達の陰謀を知らなかったのではあるが，同じ家系であり彼女の望みも分っていた。気取り屋で誇りたかい野心家の彼女はこの点に関してはイポリットに似ているが，彼女は決して自分から愛そうとはのぞまなかった"アリシ姫はイポリット王子と同格者である"とジャン・ルイ・バローも"Phèdre"の中で書いている。彼等は全く類似的な行動をし，また自分達の愛を内に秘め，王宮を出発するという時にイポリットはアリシへの愛に負け，自尊心の強いアリシもイポリットへの愛に屈した。彼等の運命は平行線を辿っていたといえる。

（注）

(1) Ch. Dedeyan : Racine et sa Phèdre
(2) J. L. Barrault : Phèdre
(3) Ch. Dedeyan : Racine et sa Phèdre
(4) J. L. Barrault : Phèdre
(5) J. L. Barrault : Phèdre

参考文献

Racine : Phèdre
M. Delcroix : Le sacre dans les tragedies profanes de Racine
J. L. Barrault : Phèdre, mise en scène et commentaires
Ch. Dedeyan : Racine et sa Phèdre
R. Picard : La carriere de Jean Racine